

赤シートに隔てられた〈虚構世界〉

太田真爾

受験生である私は、英単語の暗記を習慣としている。それも「赤シート」を使って。この作業は私に限った話ではなからう。多くの学生は、勉強アイテムの一つである赤シートを使って脳内に暗記情報を取り入れてきた。答えは赤い文字で書かれ、赤シートで隠せば姿を消す。学習者は本当に暗記できているのかを簡単かつ的確に把握できる。そして赤シートを付けて見えなくなるのは決まって本質。問題集というならば「答え」にあたる。そんなある日も赤シートで英単語を覚えていたのだが、そのときだけは妙に恐ろしくなってしまう。理由はすぐに分かった。

「目に見えるものが、ほんとうのものとは限らない」。村上春樹の小説に登場するこのセリフが勉強中、脳裏をよぎったからだ。普段なら「深い」という純然たるエモーションに留まるのだが、そのときは違った。どこか奥深い世界へ私を誘っている気がしたのだ。

赤シートは答えを隠すだけの道具、という認識はあながち誤ってない。だが、私は「赤シート」の使用者は〈虚構世界〉の住民として自ずと参入する」という角度で認識している。問題集に登場する重要語句は赤い文字で刷られ、赤シートで覆えば突如、姿を消す。こういった前提は、いわば赤シートを境に、本来は存在するはずの事物が姿を消す〈虚構世界〉が突如出現し、使用者は逡巡することなくその世界の住民として参入する、ともとれる恐ろしいことではないか。もちろん、赤シートを覆う行為単体をみて恐ろしいというのは誇張だろう。一つの問いに対し、どんなに多くの答えを模索し、思索にふけていたとしても、赤シートの向こうにはすでに一つに絞られた明確な答えが待ち構えている。それ故、赤シートを外せば答えはすぐに浮かび上がり、〈虚構世界〉からの脱出も容易だという「ささやかな安堵」も見え隠れする。このことを使用者が自覚している以上、恐ろしいという評価は下せない。だが、「無自覚なまま参入している」場合なら事態は深刻だといわざるをえない。気づくまで〈虚構世界〉の住民として一向にその世界から脱出できないのだから。一見、赤シートを外すだけで〈虚構世界〉からは脱出できるといふ安堵から、たとえ自覚する時期が遅れたとしても取り返しのお話だと思いかも。だが、本当にそうだろうか。現実世界と〈虚構世界〉の狭間は、まさしく赤シートを「付ける／外す」といった機械的な行動を繰り返すところに位置する。だがこの機械的な行動は二択で単純すぎ

るが故に、あるとき赤シートを覆っていないのに、あたかも答えがあるかのように錯覚する事態が頻発する。これが癖となれば、今、赤シートを覆っているかどうかの見分けが困難となり、この先、何事も答えがある前提で生きていく恐れもある。最終的には、答えに全力ですがり、脳内で思考することを放棄する。哲学のような答えのない問いに会ってしまえばお手上げだろう。本来、先入観を消し、自分の暗記能力を高める有効手段として赤シートを使ったはずが、その行為の自覚がなくなった途端、あるかどうか、正しいかどうかも分からぬ答えの存在を前提とするジレンマに陥る。したがって赤シートを使用するという決意が芽生えた瞬間から、我々は「覚悟と責任」を持たねばならないのだ。

一方、〈虚構世界〉のほうが現実世界よりも争いごとが少なく、平和だというプラスの考え方もありえる。そもそも本質も丸見えで赤シートが外されたままの世界は本当に美しいのか。現実世界でもこういういった経験はないだろうか。知らないほうがよかったことを知ってしまったときのあの後悔というか喪失感というか良心の呵責というか。「知らぬが仏」とあるが、時としてこれは赤シート未使用者への警告にも聞こえるはずだ。常に、見えなくともよいもの、結果的に見えないほうがよかったものすべてが筒抜け状態の世界はなんとも生きづらい。たとえば「仲人の空言」という言葉の通り、結局は欠点を隠して、建前で相手をおだてたり、褒めたりしてプラスの方向にもっていく。なぜ、わざわざ本心と変えてまで反対の言動をとるのだろうか。それは、このほうが双方、争いごとなく良好な関係を維持しやすいというコミュニケーション上の知恵が潜在しているからだ。もつといえ、赤シートを覆った状態だからこそ、本心に関わらず、場の空気を優先したり、同調圧力にわざと負けたりと、神経を研ぎ澄ませて読み解く集中力が集団主義では必要になったといえる。相手への思いやりや配慮というのは、赤シートを外したとしても一向に見えない概念だ。それ故、外界には発露されぬ不可視な内面に一層、気を配る高尚なコミュニケーションが特に日本では浸透したのだろう。

では赤シート使用者と未使用者に広がる両者の世界にどのような違いがあるのか。まず、使用者は、赤シートを覆っていることに無自覚ならば、表面上を理解するのがやつとで短絡的な思考に陥りやすい。赤シートを覆う際、使用者はさまざまな記憶が脳をよぎるが、思考の途中で答えを確認しないまま問題集を閉じれば、決まって人はモヤモヤする。だが、突発的に生じたモヤモヤは、利他的であるが故に時間が経つにつれ薄まり、次第に忘却されていく。本来、そのモヤモヤは答えに関心を抱き、そして追い求めようとする学問的成長に繋がる好奇心ゆえに重んじらるべきだ。だが、平時の癖で大抵は「すっぱい葡萄」のように合理化・正当化し、真の解答に対して無関心になる。そして自分の短絡的な予想に置き換えたり、そもそもそのことも忘れてたりすることで少しでも安堵を覚えようとする。最

最終的に、使用者が無自覚に赤シートを覆って生活する場合、仮に本質まで見抜けなかったとしても、短絡的な価値観や考えでそれを補完しようとし、程度問わずその代用で大抵は満足してしまう。これが続けば、フェイクニュースをはじめとする意図的な情報操作に踊らされやすくなるだろう。本質を把握していないのに全体像を理解した気でいてしまうのだ。そのような半可通状態の人が多いほど、情報は吟味されぬまま人々は信じきって拡散し、社会の混乱を招くに違いない。近年、特に「メディア・リテラシー」を育むべきだという風潮が高まっている。たとえ見えているつもり、分かっているつもりと自分の中で高をくくっていたとしても、実は不可視な赤シートが両目に覆われているせいで一知半解であるケースは少なくないだろう。今後、さらなる情報化に向け、我々は赤シートで隠された部分も見落とさない深い洞察力が不可欠なのだ。

それならば赤シートで隠された部分がない未使用者は長所だけだろうか。今までの論理に従えば、赤シートがないため、本質までしっかりと見極め、大局的見地に立った判断が可能だといえそう。しかし、形もなく、触れることもできず、目にも見えない状況に対しては、未使用者にとって強敵にほかならない。普段から何事も「見える」前提で大局的に物事を捉えているが故に、不可視な概念への向き合い方には未知だからだ。であれば赤シートを外しても見えないようなものはどうやって見るのか。そこで活躍するのが「想像力」だ。イマジネーションやクリエイティブの力で赤シートを外しても見えなかった世界や姿を表現しようと努めるのだ。あえて普段とは違う角度から物事を見たり、見えなくしてみたりといった好奇心から日常の世界をみるみる変えていく。そういった点で、想像力は赤シートで覆われた世界のほうが培われ、必要性も高まる。一見、同じ世界を見ている以上、見える世界は全員、同じはずだ。だが、芸術家などは、同じものでも一般の人とは違う見方や角度から捉え直し、個性的に表現する。だからこそ一概に「目に見えるものが、ほんとうのもの」とは言いきれないのだ。仮に赤シートなしでこの世界を眺めていたとしても芸術家は、あえて赤シートで覆ってみたり、断片的に赤シートを散りばめて、見えるところと見えないところを作ってみたりするなど、あらゆる特異な手段を用いるだろう。そうやって現実世界という限られた条件下でも幅広い可能性を生み出し、芸術的価値を高め、そして根気よく発露していくに違いない。これに倣って我々もまずは身近なものを多角的かつ多面的に観察し、あえて見えない／見えづらい状態をつくって、それをイマジネーションやクリエイティブの力で表現する練習を積むのもよからう。自ずと赤シートに干渉されない〈目〉を確立できるはずだ。

赤シートとは捉えようによつては非常に不可解であり、哲学的な概念である。しかもこれまで述べてきた通り、どちらの世界にも複雑な要素が絡み合っており、一概にどちらが

よいとは断言できず、諸刃の剣だ。しかし、赤シートを境に良くも悪くも世界がガラリと変貌することは確かな事実だ。本来、形もあり、触れることもでき、目にも見えるはずのものが突如、消える。自分に見えている世界が必ずしも他者と同じとは限らない。ともすると目の前にある本稿も、私がいいた「ほんとうのこと」は赤シートによって隠されているのかもしれない。そうイマジネーションしながら本稿を咀嚼するのも一興であろう。

ふと、我に返った。目の前には単語帳が開かれたままだ。今度の私は暗記しようとはしていない。だが、赤シートを持っている。私の手にある赤シートを通して、窓から差し込む夕日がそのページをほんのり赤く照らしている。そこに刷られた赤い文字は、私の目には隠れず、はつきりと見えていた。

「あのセカイからもう帰っていたんだな。」

赤く染まった意志の上で、現実の私はそう〈自覚〉した。